



の前、ドイツなどでは肉食が好ましいものとされていなかった)、リューネブルグの岩塩、木材、穀物、毛皮などであった。

その後、神聖ローマ帝国が衰退し、勢力を拡大していった各地の諸侯が各都市に圧力をかけ、同盟を脱退する都市が増えていった。

大航海時代となった16世紀には欧州の商圏がバルト海や地中海から大西洋、北海に移り、ハンザ同盟都市は衰退していった。しかし北海が出入り口であるハンブルグはさらなる発展を遂げることになる。

#### 4. ハンブルグ港

なぜ上流のここに大港湾都市ができたのかが不思議であった。

一つは干満差で、エルベ川河口あたりの干満差は8~10mもあり、これでは荷物の積み卸しが難しい。川を上流にさかのぼると干満差が少なくなる。少ないといっても4~5mはありそうであるが、このことが内陸にハンブルグ港ができた由来らしい。夜、ライトアップされた倉庫街の写真撮影にでかけた時、底が見える運河があった。感潮域はハンブルグの上流34kmのGeesthacht市にある堰まで遡る。

もう一つは、ハンブルグの北にのびるユトランド半島が原因のようである。エルベ川流域より東の地域はバルト海が出口になるが、バルト海に出て西に行く場合デンマークのある長さ400kmものユトランド半島を大廻りしなければならない。そうすると大西洋などに行く場合、大きな船が入れてしかも東方に寄っているハンブルグが最も輸送に適していることになる。エルベ川は最下流で西北西に流れているので、川の上流の港の方が東北部ドイツの陸上輸送距離を縮めることができる。北海や大西洋貿易が大きくなるにつれてハンブルグの有利性がどんどん増すことになる。

ハンブルグ付近からリューベックを通過してバルト海に至る運河も建設された。

ハンブルグ港を見通せる高架橋から見る機会があったが、荷役施設が広大に展開され、水面も広く、我が国の港湾都市と変わらない景色であった。エルベ川はハンブルグ近くで二つに分かれ後に合流していて、その中州地帯は長さ10km、最大幅6kmと広大なもので、横浜港から川崎港までの港湾・工業地帯くらいの広さである。コンテナ埠頭、石炭などのバラ積み埠頭、大きなドックなど、港湾施設はみなこの中にある。ドックはいまや新造船がアジアに移っているため、定期補修や改修が主となり、大型のタンカーや客船がドック



港湾施設

高架橋から。手前が石炭などのばら積み岸壁、むこうにコンテナ埠頭



ドック

客船が修理で入っていた。

入りしていた。このように港を見ると河口から100kmも遡っているとは思えない。

中心市街と南のドック地区を結ぶエルベトンネルがある。長さ400m、直径6mの2本のトンネルが、1911年に川底に建設された。人や車は出入り口からエレベーターでトンネル内に上り下りする。今でも現役で、ドックの工具や自動車を運んでいる。

#### 5. ハンブルグの街

街は低湿地を埋め立てるような形で市街地が形成されている。このため中心市街では運河や水路敷きがあちこちにあり、大きな湖もある。ハンブルグ港から1.5kmの2本の運河を遡るとアルスター湖。運河の途中には閘門があり、小型船が通行できる。アルスター湖は一辺500mくらいの角形をした内アルスター湖と広い外アルスター湖とに橋で仕切られている。内アルスター湖の回りはホテル群などがあり、大きな噴水が



内アルスター湖

大きな噴水が上がっている。その向こうに市庁舎

上がっている。外アルスター湖は長さ2km程度の細長い形で、まわりは高級住宅街に。昔は湖岸が邸宅の私有地であったが今は湖岸道路ができ、誰でも湖のまわりをめぐることができる。

第二次大戦ではハンブルグ市街地の6割が破壊され、戦後復興した。

## 6. 倉庫街と再開発

エルベ川沿いに運河が何本も走り運河に倉庫街が面している。その規模は大きく、昔のヨーロッパの経済物流のすごさが実感できる。最も大きい運河は長さ1.5kmくらいあり、途中で枝分かれして両側に倉庫がびっしり張り付いている。倉庫はレンガ造りで何階建てにもなっていて運河側も道路側も各階に大きな扉があり、クレーンで持ち上げて運河や道路から直接上層階へ倉庫に荷物を出し入れするようになっていた。



倉庫街の眺め  
ずっと続いている



荷揚げ口

倉庫ビルの各階に両開きのドアがあり、上のクレーンから降りているロープを操作して荷物を上げ下げして倉庫に運び込んだり、外に出したり。



再開発された倉庫街



再開発ライトアップ

倉庫街は夜にはライトアップされ、いい景観を提供していた。

これだけ規模の大きい倉庫街であったが、物流が海上コンテナ輸送に移行してしまい、倉庫の役割が終わり、オフィスビル、税関博物館、倉庫博物館、鉄道模型館など各種博物館への大規模な再開発が進んでい

る。運河を渡る歩道橋もつくられている。

訪れた際も広い区域が工事中になっていた。改修の際できるだけ昔の面影が残るように配慮されて、運河が残されて地域景観の価値増進に役だっている。

## 7. ハーフエンシティ計画

現在倉庫街の東から南にかけての広い区域がハンブルクのシティセンターの南部分として大規模に再開発されている。このハーフエンシティ計画用地は155haで、このうち55haは運河などの水辺であるが、港のイメージや歴史を残すため埋め立しない事を前提としている。この場所の地盤高さは非常に低く設計されており、洪水時には建物の1Fが浸水するほどの高さであるが、これも堤防などを造ったり、地盤高さをかさ上げしたりすると親水性が失われるため、建物の1F部分を水密性にするにより、対応している。

今まで港湾施設として使われていて、一般の人にはあまり知られていなかった場所を住宅街やオフィス街として使用する計画であり、魅力的な街にするため、有名建築家が建物の設計を行い、新たに緑多い公園や道路等、住民の快適さを図るための様々な施設を造っていくことにより、ハンブルク市民のためだけではなく、ドイツを代表する観光スポットの1つとすることを念頭に置いている。

エルベ川に面した地区西端には下が倉庫のような赤煉瓦で、その上に全面ガラス張りの、コンサートホールを持つ、最上部が波の形をしたビルが建設中で、2017年に完成予定。360度の展望台も設置される。

## 8. 市庁舎と環境衛生の女神像

1842年の大火で消失したあと再建された市庁舎が1897年に完成した。当時ハンブルクの経済的繁栄は頂点に達し、市庁舎は高さ112mの塔を持ち、650を超える部屋数と大変豪華なものである。

入場料なしで入ることができる市庁舎の中庭中央に、竜を制圧している女神像の噴水がある。下には三段の水盤。像は、環境衛生のシンボルであるギリシア神話に登場する女神ヒュギエイア (Hygieia) で、健康の維持や衛生を司る。医神アスクレーピオスの娘で、英語のhygiene (衛生) の語源となっている。竜はコレラをあらわしているようである。この像は1892年のコレラ大流行により多くの死者を出した後、水道システムの改善により、流行を終焉させたことを記念し、いつまでも記憶に残るように造られたとのこ



市庁舎  
アルスター川のほとりに



環境衛生シンボルの女神像  
市庁舎の中庭に

と。像の下には、水のありがたさを人の作業であらわした像が取り巻いている。

19世紀におけるコレラの世界的大流行は1817年に始まった。この年カルカッタに起こった流行はアジア全域からアフリカに達し、1823年まで続いた。その一部は日本にも及んでいる。1826年から1837年までの大流行は、アジア・アフリカのみならずヨーロッパと南北アメリカにも広がり、全世界的規模となった。以降、20世紀はじめまで6回にわたるアジア型の大流行があった。1884年にはドイツの細菌学者ロベルト・コッホによってコレラ菌が発見された。しかし、その後、日清戦争の始まる2年前の1892年8月にエルベ川に面したハンブルグで突如コレラの流行が始まり、たった数週間の間に8千人が死亡した。ただ、ハンブルグの下流に隣接するアルトナではほとんどコレラ患者は発生しなかった。ハンブルグ、アルトナはともに上水道の原水はエルベ川だった。

アルトナでは都市の前を流れるエルベ川を上水道の原水にしていたが、1859年以来すべての原水を緩速ろ

過して給水していた。これに対してハンブルグ市水道の取水口は4.5Kmほど上流だったのに、原水を短時間沈殿させるだけで給水していた。

緩速ろ過が単に原水から濁りを除去するだけでなく、細かい浮遊物に付着しているコレラ菌も除去することにより細菌除去作用のあることが示されたが、莫大な人命を失ったの教訓であった。

巨大な庁舎を建てるほど大きな繁栄を謳歌しているこの時代に一方で多数の死者が出る感染症が大流行していた。

## 9. 終わりに

コンテナ輸送という大流通革命により、多くの大都市の港湾地域が変貌している。日本では昔経済規模が小さかったせいか再開発の規模は巨大ではないが、欧州では大規模でロンドンでは空港が建設されるほどである。何処も運河を残すことにより、素敵な水辺環境



ハンブルグのマンホール  
市の紋章入り。



アルスター川沿いのビル街  
内アルスター湖から港までの水路で。街中のビルも倉庫っぽいデザインに

を提供するものとなっている。

城塞のような模様が入ったマンホールを見つけ、欧州に殆どないデザインマンホールを見つけたと想像していたらこの模様はハンブルグの市章であった。市章が入ったマンホールは欧州所々で見受けられる。

日本からドイツへの直行便はフランクフルト、ミュンヘン、デュッセルドルフで、ベルリンやハンブルグに行っていない。このことは大都市が少なく小都市に人口がうまく配置されているドイツでは国際的な機能まで各地に分散していることを示している。

参考 APEC環境技術交流バーチャルセンターHP  
[http://www.apec-vc.or.jp/j/modules/tinyd00/?id=53&kh\\_open\\_cid\\_00=8](http://www.apec-vc.or.jp/j/modules/tinyd00/?id=53&kh_open_cid_00=8)



外アルスター湖  
中心市街方向



エルベトンネルのエレベーター  
何台もあって、人と自動車を上げ下げしている。現在自動車は片側4車線の新エルベトンネルを主に利用。